

## 郷 愁

「さいたえん」の会員になって一年が過ぎた。グリーン・ツーリズムという言葉さえしなかった。いろんな方々の話を聞かせて頂き、私なりにそれについて考えてきたつもりだ。世界中のあちこちで自然が破壊され、その弊害についても様々な意見が出されているが、自然破壊はいつこうに止まらない。これ以上自然を壊すことに歯止めをかけて、可能な限り自然を取り戻すことがグリーン・ツーリズム活動の目指すところであるべきだと思うようになった。

私は1943年（昭和18年）3月25日に福岡県八女郡水田村大字下妻（現在の筑後市）で生まれた。戦争の真っ最中である。敗戦の色が濃くなった2年後は田舎村でも空襲警報が鳴り、母や兄に手を引かれ近くの防空壕へ避難していった記憶がかすかに残っている。それ以上戦争についての記憶はない。しかし敗戦後の厳しい生活は決して忘れることは出来ない。同世代の方々はほとんどそうだと思うが常におなかを減らしていた。私が育った地域は純農村地帯で、農家がほとんどだった。戦後10数年間は農家が一番裕福な暮らしをしていた。そんな環境の中で私のうちは非農家である。子ども達は毎日外で一緒に遊び、腹が減ったらおやつにおにぎりを食べていた。みんな白いご飯のおにぎりなのに私のは麦がいっぱい混ざったものだ。白いご飯に対するこだわりはその後数十年間続いたものだ。さつまいもは茎まで食べたし、野草も食べた。母と弟と私の三人でセリやのびるなどを摘みに行った。そんな生活を送っていた少年時代には何とも思わなかったことが今ではとても懐かしく思えてならない。春になると美しい花がたくさん咲いていた。田んぼのレンゲソウが忘れられない。すべての田んぼにレンゲソウが咲いていて、子どもながらにもすばらしい光景だと思ったものだ。夏が近づくと田植えが始まる。その期間3~4日、学校も休みになり、子ども達も田植えの手伝いをする。牛や馬に鋤をつけて田んぼを耕す。水路が整備されていなかったのも、水車を踏んで水を汲まねばならない水田もあった。日当をもらって田植えの手伝いをするおばさん達がどこからともなくやってきて田植えが始まった。子ども達もどろんこになって手伝った。やがてすべての田んぼは緑で埋め尽くされ、いろんな生き物たちが活動し始めた。どじょうもたくさんいて、子ども達はどじょううけでそれを取り、売って、小遣いを稼いだ。田植えが終わると本格的な夏がやってきて夏休みが始まる。午前中は絵日記を書いたりその他の宿題をしたりして過ごし、午後になると近くを流れている沖端川で魚やシジミ貝を取って遊んだものだった。大事に育てられた稲は11月になると黄金色になり、たわわに実った。取り入れのシーズンがやってきた。脱穀機が田んぼの真ん中に置かれ、束ねられた稲をそこまで運ばなければならない。また子ども達の出番がやってきた。田植えの時と同じように、学校も休みになる。取り入れが終わったら落ち穂拾いをして、それを学校にもって行き、お金に変えて図書館の本を買ったりしていた。取り入れが終わった水田には「藁こずみ」が作られ、子ども達にとっては格好の遊

び場になった。何も植わっていない広々とした田んぼで模型飛行機に夢中になっている少年達もいた。冬になっても外で遊んだ。川の堤防の竹藪でかすみ網で雀などの小鳥を捕まえ焼き鳥にして食べたりもした。そうして一年が過ぎていった。

現在、ほとんど毎日およそ 70 分間散歩している。久留米市城島町に住んでいるが生まれ育ったところと同じように農村地帯である。水田はすべて長方形に整備され灌漑用水も申し分ない。クレークはコンクリートで固められている。春にその間から生えてきた草に魚が産卵している光景はなんとなくもの悲しい。田植えや取り入れのシーズンは機械が目立ち人の姿はあまりない。田んぼの畦道には時々除草剤がまかれ、それでもそこに植わっているたくましいのびるや土筆をとって食べる気にはならない。時代とともに農村の状況はガラリと変わった。整備された農地、機械化された農業。それらに対して異論はない。でも、使用されている化学肥料、農薬、除草剤 etc...は何とかならないだろうか。全部 60 年前に戻せとはいわないけれど・・・。

里山と呼ばれる地域がまだ各地に残っている。「開発」とか「公共事業」という名の下で行われる今以上の環境破壊はもう見過ごせない。人の生活と自然との調和を図っていかなくてはならない。私のグリーン・ツーリズムは身の回りの自然を守るため世界の平和を目指すことである。夏は快適な九重で酒を飲むことだけが目的で会員になったが、会員の皆さんにいろんな事を教えて頂き、しかも楽しく美味しい酒を飲ませて頂き有り難いと思っている。

白髭